昭和６２年度　第６回郷土史講座

若狭地区における発掘調査の成果

昭和６３年３月１９日（土）

福井県立若狭歴史民俗資料館

昭和６２年度発掘調査遺跡一覧

遺跡名	所在地	時代
1．丸山河床遺跡	小浜市丸山52号字出口	弥生時代前期
2．えご遺跡	三方郡三方町北前川	縄文時代～平安時代
3．向山古墳	遠敷郡上中町堤 下吉田	古墳時代中期
4．森ノ下遺跡	遠敷郡上中町堤 森ノ下	古墳時代・奈良時代
5．有田坂遺跡	遠敷郡上中町堤 有田坂	奈良時代
6．脇向遺跡	大飯郡大飯町大島 脇向	奈良時代～平安時代
長浜遺跡	大飯郡大飯町大島 長浜	縄文時代・古墳時代
宮留遺跡	大飯郡大飯町大島 宮留	古墳時代後期
7．朝比遺跡	遠敷郡名田庄村口坂本 朝比	不明

1．丸山河床遺跡

所在地　福井県小浜市丸山52号字出口

調査原因　北川改修工事の掘削で遺物が散乱したため、小浜市教委文化課、若狭歴史民俗資料館、建設省で協議して遺跡範囲・層準を確認調査することにした。

調査主体　小浜市教育委員会

調査担当　若狭歴史民俗資料館

調査期間　1987年11月25日～12月 5日

調査面積　40m²

時　代　弥生時代前期新段階、古墳時代

弥生前期新段階の遺物
- 土器　約1000片
- 縦斧柄（カシ）
- 黒漆塗木製高杯（ケヤキ）
- ヒョウタン果皮・

調査概要

丸山河床遺跡は小浜平野の中央部、北川の川底の下に広がる遺跡です（図１）。今までその存在が知られなかったのはきわめて深いところにあったからで、護岸基礎工事で海抜－１ｍまで掘り下げられたことで発見されることになりました。そこで調査はこの遺跡がどういう広がりを

図１　丸山河床遺跡の位置

図２　若狭の弥生時代前期の遺跡

もち、どのくらいの高さにあって、いかなる性格のものかを明らかにして、遺跡を保護していく立場で工法を検討するためのデータをえることを目的に行いました。

丸山河床遺跡は河川の後背の湿地に物が廃棄されてできた遺跡です。その時期は稲作が始まった弥生時代の前期（紀元前250～100年頃）の中頃で、若狭で最も古い弥生時代の遺跡です。これまでにも半島部や外海に面した海岸部の４遺跡がその時期の遺跡として知られていました（図２）。ただ、すべて甕形土器（煮炊き用）しかでないという特異性があって、はたして水田農耕が前期の段階で定着していたかどうか疑問が持たれていました。しかし、その疑問を解消しただけでなく、畿内での開始とさほど遅れない時期に若狭でも稲作が始まっていたことが明らかになりました。今回は発見されませんでしたが、すぐ近くにその時期の集落や水田があることはまちがいないと思います。

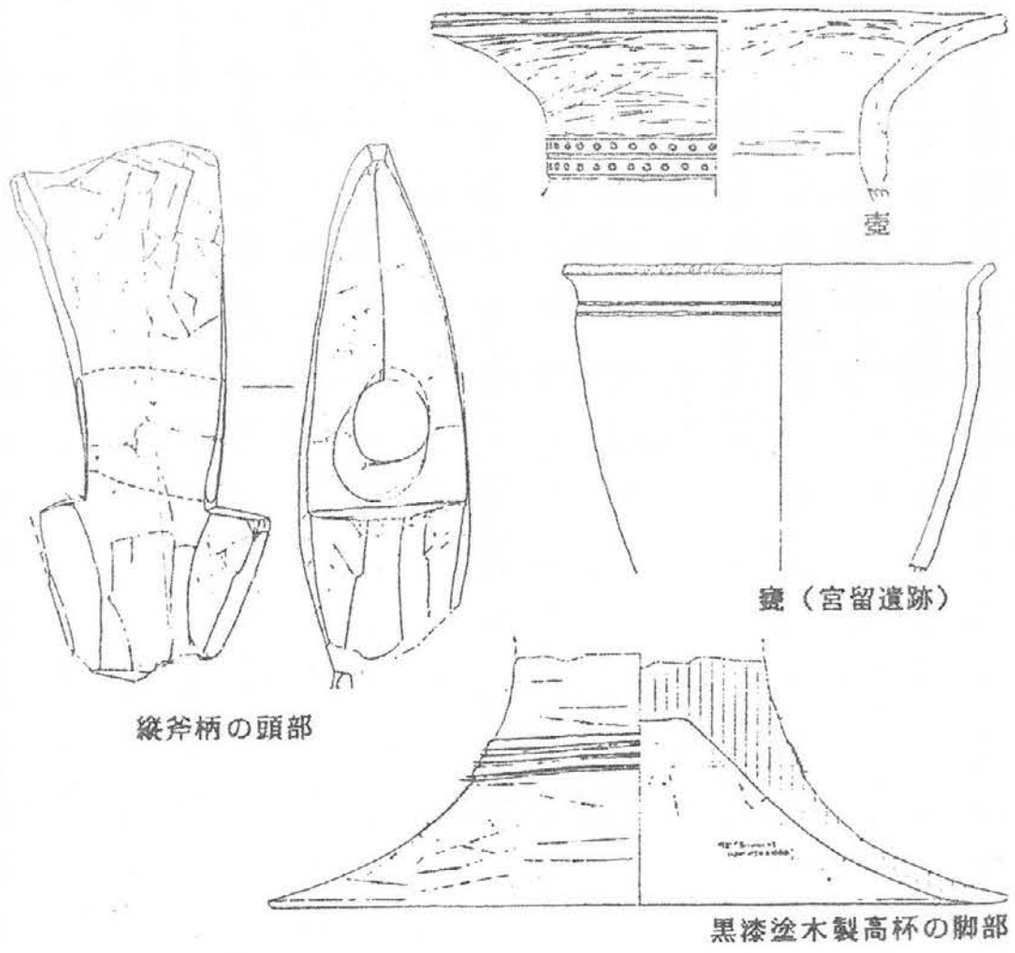


図３　丸山河床遺跡の遺物　（ s.= 1 / 3 ）

２．えご遺跡

所　在　地　三方町北前川６号竹ノ腰外６字　鳥浜80号江跨外１字
調査原因　県営圃場整備事業
調査主体　三方町教育委員会
調査担当　田辺常博
調査期間　範囲確認調査　昭和62年 9月28日～11月 9日
　　本調査　　昭和62年11月16日～12月21日
調査面積　範囲確認調査　３８０㎡
　　本調査　　３６５㎡
時　　代　縄文時代中期　弥生時代後期　古墳時代前期・後期
　　奈良・平安時代

調査の概要

えご遺跡は、三方町の東部地区の鯖川流域平野部のほぼ中央で標高約４．０～１０．０ｍの水田地帯に位置している。

遺跡の性格は、ＪＲ小浜線沿いの遺跡東側の微高地（標高７．０～１０．０ｍ）で今古川の氾濫砂礫を多量に堆積するＡ地区、江跨川より東側で標高４．５～６．０ｍの低湿地特有の未分解の有機物を多量に混入する泥炭層が堆積するＢ地区及び江跨川西側で鯖川堤防までの鯖川の氾濫土砂が堆積するＣ地区の３地区に分けることができる。

当初、範囲確認調査で、それぞれの地区にトレンチ設定し調査をすすめ遺跡の中心が板材，建築部材等の木製品を多量に包含するＢ地区であることを確認した。

ところが、Ｂ地区の中心部を東西に縦断する排水路が圃場整備により設置されるため、排水路の予定部分を全面発掘する本調査を実施した。

奈良・平安時代及び古墳時代後期に属する遺構等は検出されなかったが、Ａ、Ｃ地区の混砂層で小破片の須恵器、土師器が木製品，流木等とともに出土している。

Ｂ地区の木製品等を多量に包含するチョコレート色を呈した泥炭層は、上層と下層に分層でき、上層は伴出土器がないために時期を断定できないが、奈良・平安時代頃と思われ、下層は、弥生時代後期末の月影式に属する土器が木製品とともに出土しているところから、ほぼ同時期と思われる。

これより、Ｂ地区は、弥生時代後期末頃に遺跡周辺が湖沼化し、付近にあった住居跡等の木製品が浮遊し、これが低地部分に沈み自然遺物の有機物とともに堆積したと考えられる。また、木製品の出土状況を観察するとある程度堆積状況に方向性を見い出すことができる。

なお、Ｂ地区の下層泥炭層より下の遺跡基盤面の混砂粘性土層からは、弥生時代中期に属する土器が出土しており、この基盤面と同時期と想定される砂層より当時森林だったと思われる根木が検出されており、また、倒木した直径１．０ｍ以上の杉を半載し、木道にしたと考えられる遺構も検出されている。

出土した遺物は、遺跡の性格上土器類の出土点数がなく大部分が木製品である。

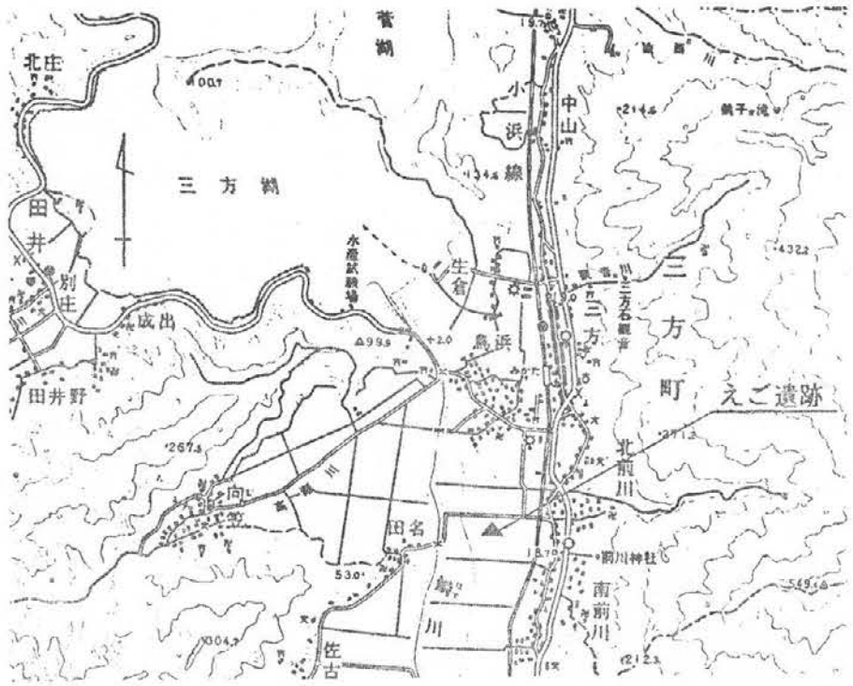
この木製品の内訳は、板材，棒，割，角材が６７０点と総点数８００点の内８０％以上を占めている。この他に、高床状建物の扉板２点，梯子１点，農具のエブリ状板１１点，田下駄５点，鍬状農具柄４点，漁具の櫂１６点（柄の部分６点を含む），祭祀具の剣形木製品３点，陽物状木製品２点等の木製品が出土しており、当時の遺跡周辺の環境及び生活状況がうかがえる貴重な資料である。

なお、これらの木製品は、一部奈良・平安時代頃のもふくまれるが、大部分は弥生時代後期末～古墳時代前期頃に属すると考えられる。

遺跡の時期上限は、縄文時代中期まで求められ、遺跡東側の砂層より船本式に属する土器が出土している。

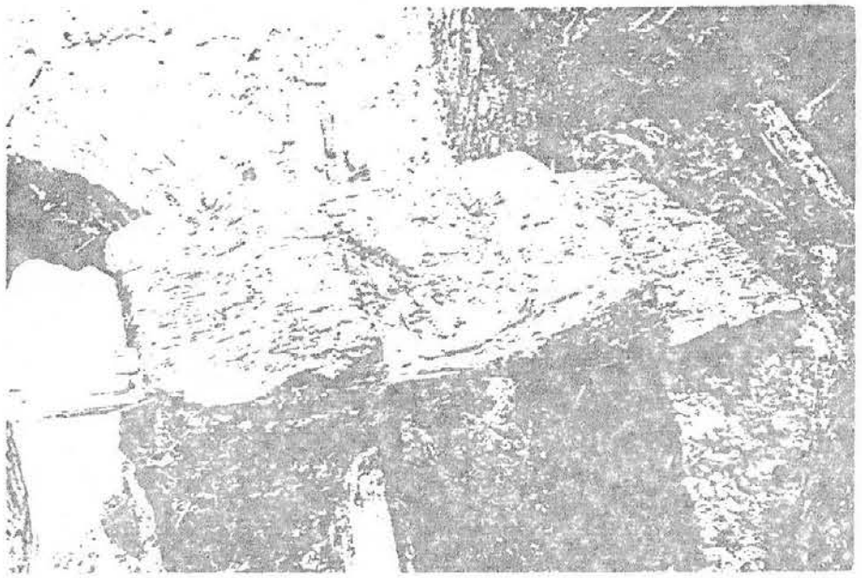
今回の調査は、住居跡等の生活面の調査でなく、当時、湖沼地だったと想定される箇所が大部分であった。当時の湖沼地が水位の低下により低湿地となり現在に残っているが、このために、自然遺物，木製品等の遺存状態が良好である。

今後、考古学的成果にプラス、鯛川流域平野部の湖沼化の時期、森林の開発等弥生時代から古墳時代にかけての古環境復元が可能である。

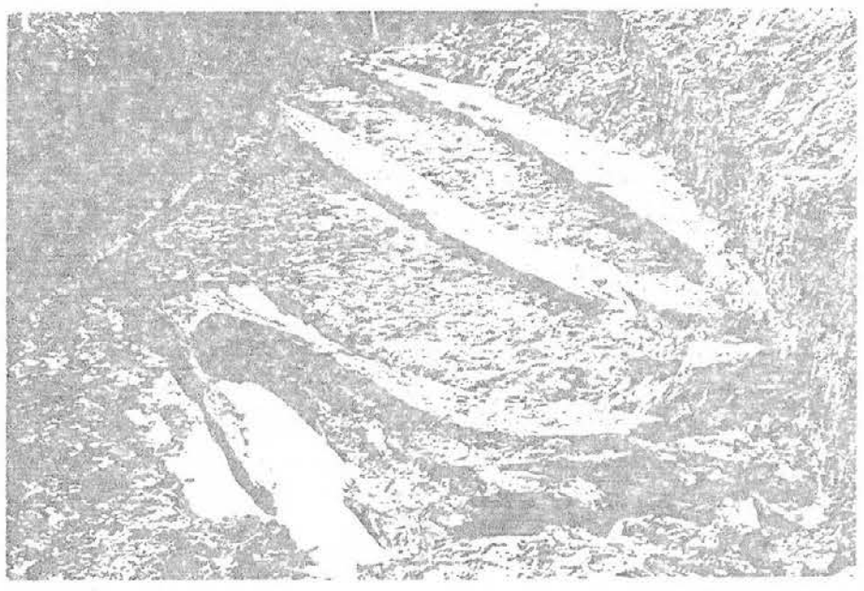


第１図　遺跡位置図

第２図　エブリ状板出土状況



第３図　梯子出土状況



第４図　木道遺構検出状況

３．向山古墳

所 在 地　福井県遠敷郡上中町堤・下吉田

調査原因　過去に尾根裾が土取りされ、その後自然崩壊がすすみ、墳丘にまで破壊が及んだ。このまま放置すれば、古墳消失もありうるため、国庫補助をうけて２ケ年計画で調査を実施した。

調査主体　上中町教育委員会

調査担当　若狭歴史民俗資料館

調査計画　昭和62年度　墳形と外表施設の調査
　　昭和63年度　埋葬施設の調査

調査期間　発掘作業　昭和62年 7月 8日～ 9月 6日
　　整理作業　昭和62年 9月 7日～昭和63年 3月31日

時　　代　古墳時代中期

調査概要

向山古墳群　　測量調査の結果、前方後円墳１基と円墳８基とからなる古墳群であることがわかりました。発掘調査を実施した１号墳は全長48.6mの前方後円墳であり、２～９号墳はいずれも径10m前後の円墳です。１～４号墳、５～９号墳とそれぞれまとまりをもって、尾根上に並んでいます。

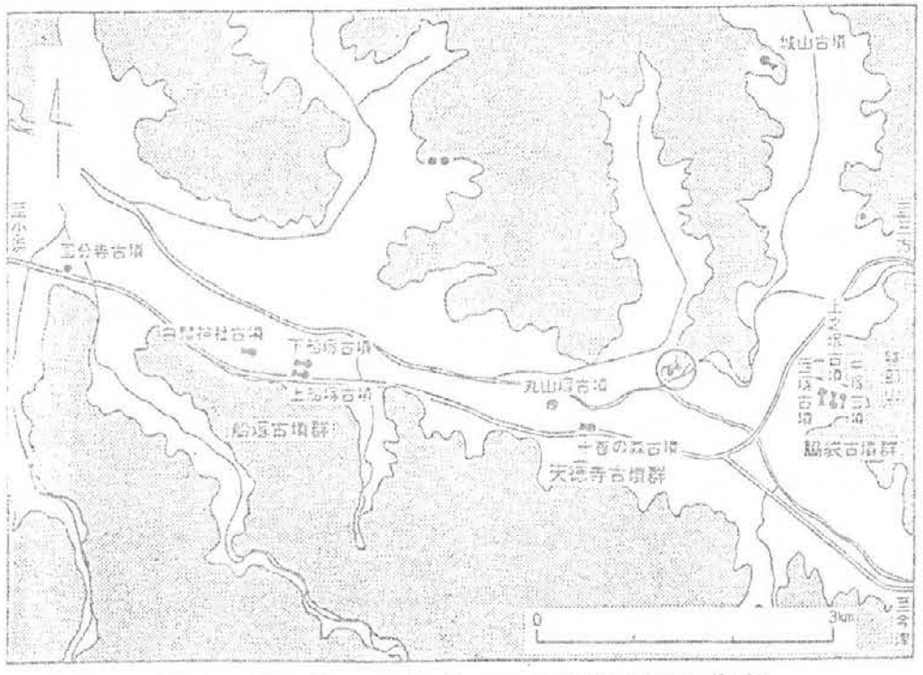


図１　上中町・小浜市にある主要古墳の分布

向山１号墳の形状と規模　　向山１号墳は２段の前方後円形に地山を削り出して造られています。上段の斜面には河原石、下段の斜面には角礫を貼りつけ（葺石）、なかほどの平坦面には円筒形の埴輪が立て並べてありました（図３）。また、墳丘頂の周縁にも同じ埴輪がめぐっていたと思われます。Ａ・Ｅトレンチで検出した墳丘基底線およびＣトレンチ下段葺石裾線をもちいて復原すると、本来の形状は図３の下図のようであったと思われ、その規模は左に示した数値になります。

全　　長	48.6
後円部径	30.6
前方部幅	27.4
くびれ部幅	19.4
後円部高	4.8
前方部高	3.8
	(m)

葺石（ふきいし）　　墳丘の威容を示し、かつ墳丘の保護を目的とするものです。石材鑑定をしたところ、鳥羽川や北川の河原石や付近の山石が使われていることがわかりました。図４をみますと、積み上げかたに一定の規則性がみてとれます。

円筒埴輪（えんとうはにわ）　　墳丘斜面のなかほどの平坦面に50cm間隔で並んでいました。多くは単純な円筒形ですが、数本に一本のわりでラッパ状に口が大きく開く朝顔形円筒埴輪をおいたものと思われます（図４・５）。50cmの間隔で全周していたと仮定すると、272本の円筒埴輪が用いられたことになり、墳頂全周にもあったとすれば総計400本にのぼります。また、墳丘裾のくびれ部に１本だけ単独で立っていました。

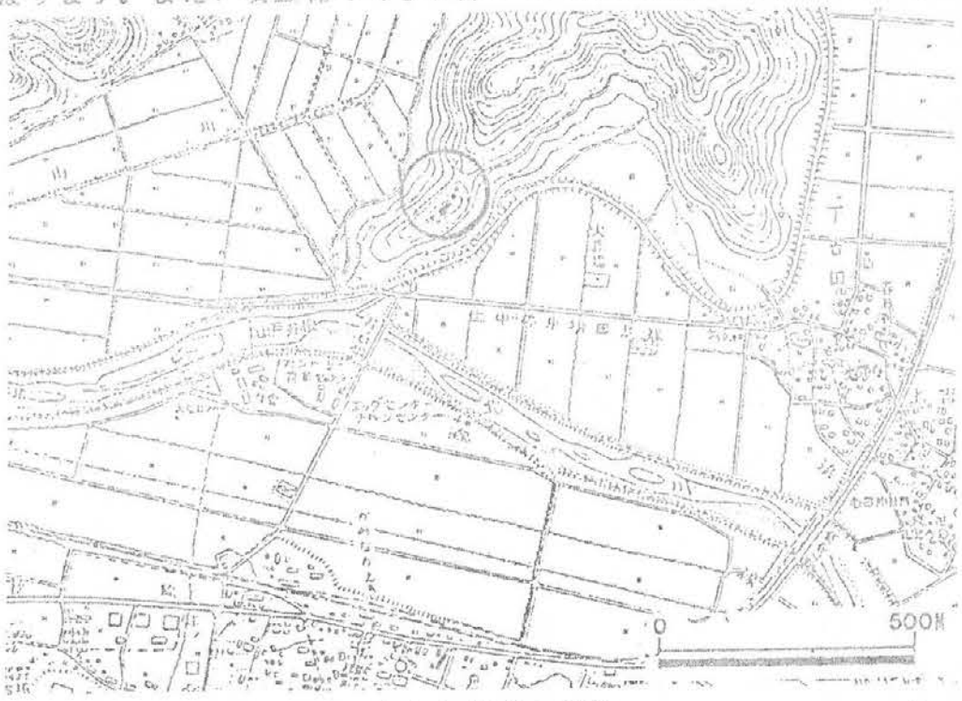


図２　向山古墳群の位置

くびれ部台状施設　　亡き王をとむらい、かつ葬儀を司る人が王位継承者であることを公に知らしめる祭祀をとり行う場所と思われます。ここからはお供え物のいれものとして使用された須恵器の破片が出ています。ＴＫ208型式とよばれる須恵器で、その時期は５世紀後半といわれています。

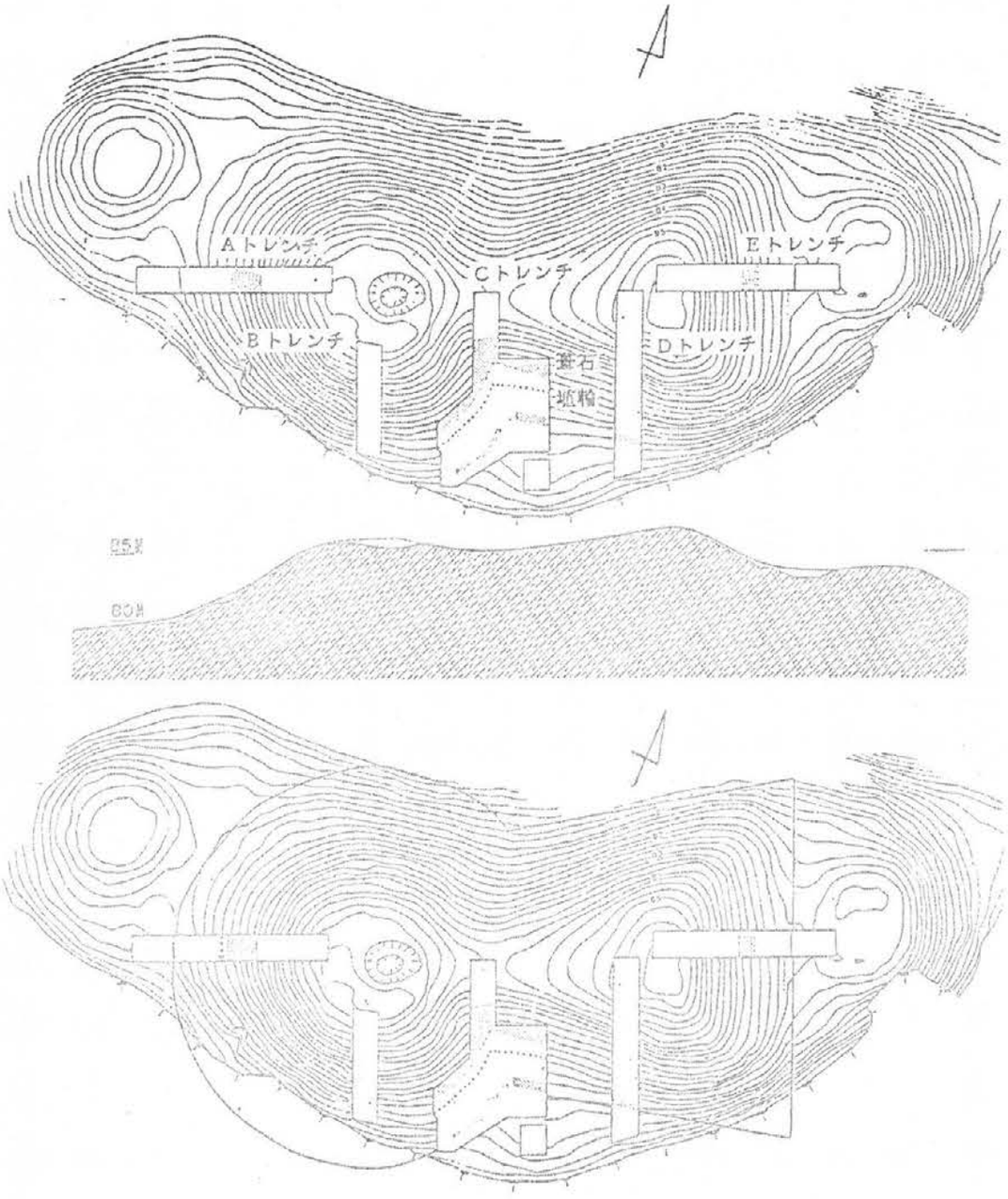


図３　向山１号墳の墳丘測量図と外形の復原

古墳築造時期　　供献された須恵器の年代から５世紀後半代と考えられます。ただし、墓前の祭祀は一定期間つづいた可能性がありますので、この年代より古くなるかも知れません。埋葬施設の中にある副葬品が明らかになれば、一層確かな年代を知ることができます。

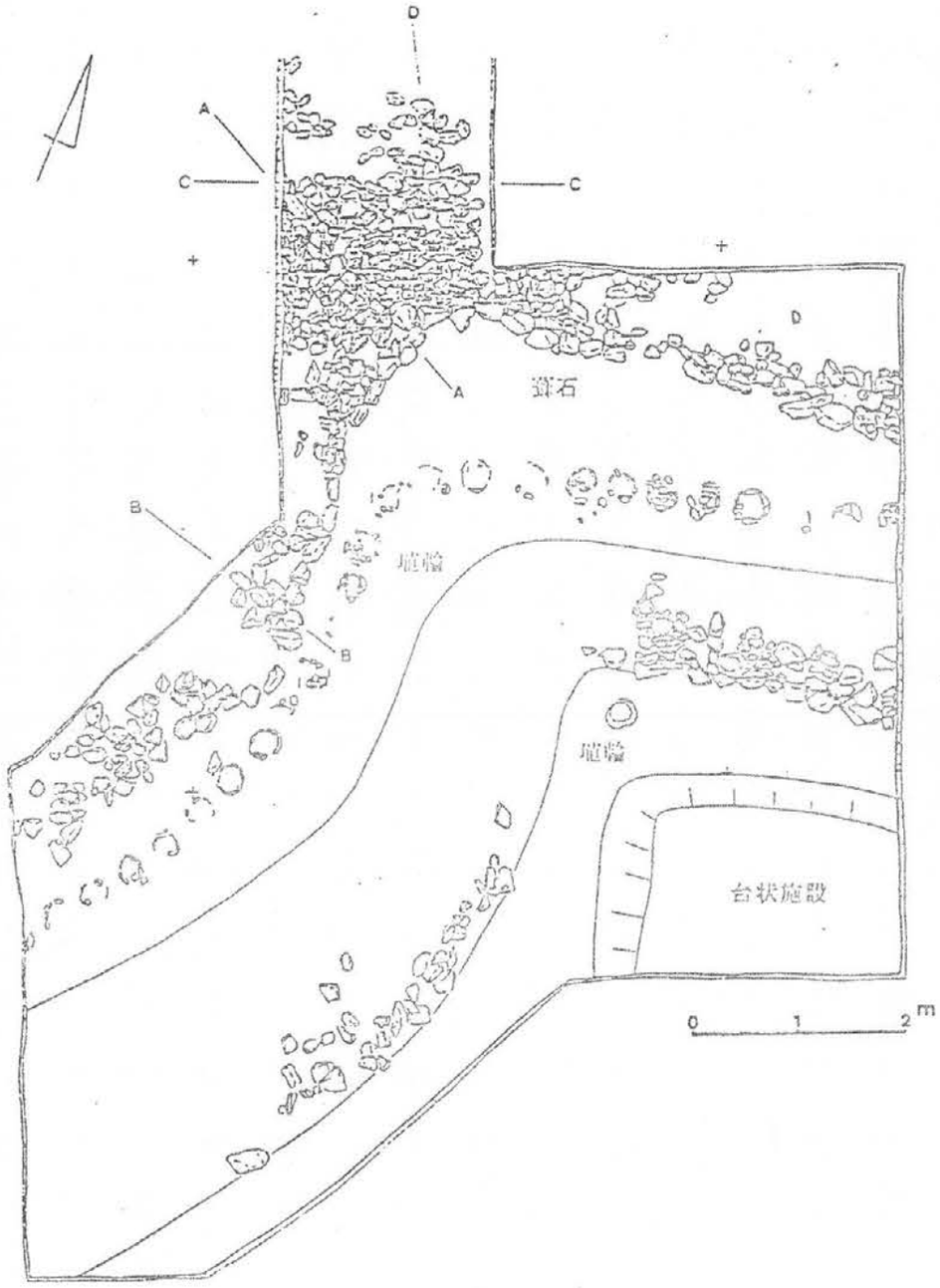


図４　くびれ部の葺石と埴輪

埴輪（はにわ）　　埴輪とは主として古墳の墳丘をめぐって立ち並ぶ素焼の土製品です。円筒埴輪と家・器財・動物・人物などを表現した形象埴輪との２種類があります。向山古墳では日傘を模した衣蓋（きぬがさ）形埴輪と家形埴輪、盾形埴輪が発見されています。衣蓋形埴輪は前方部先端の円筒埴輪の上にのり、家形・盾形はくびれ部の台状施設に置かれていたと思われます。これらの埴輪は須恵器と同様、窯で焼かれたものです。

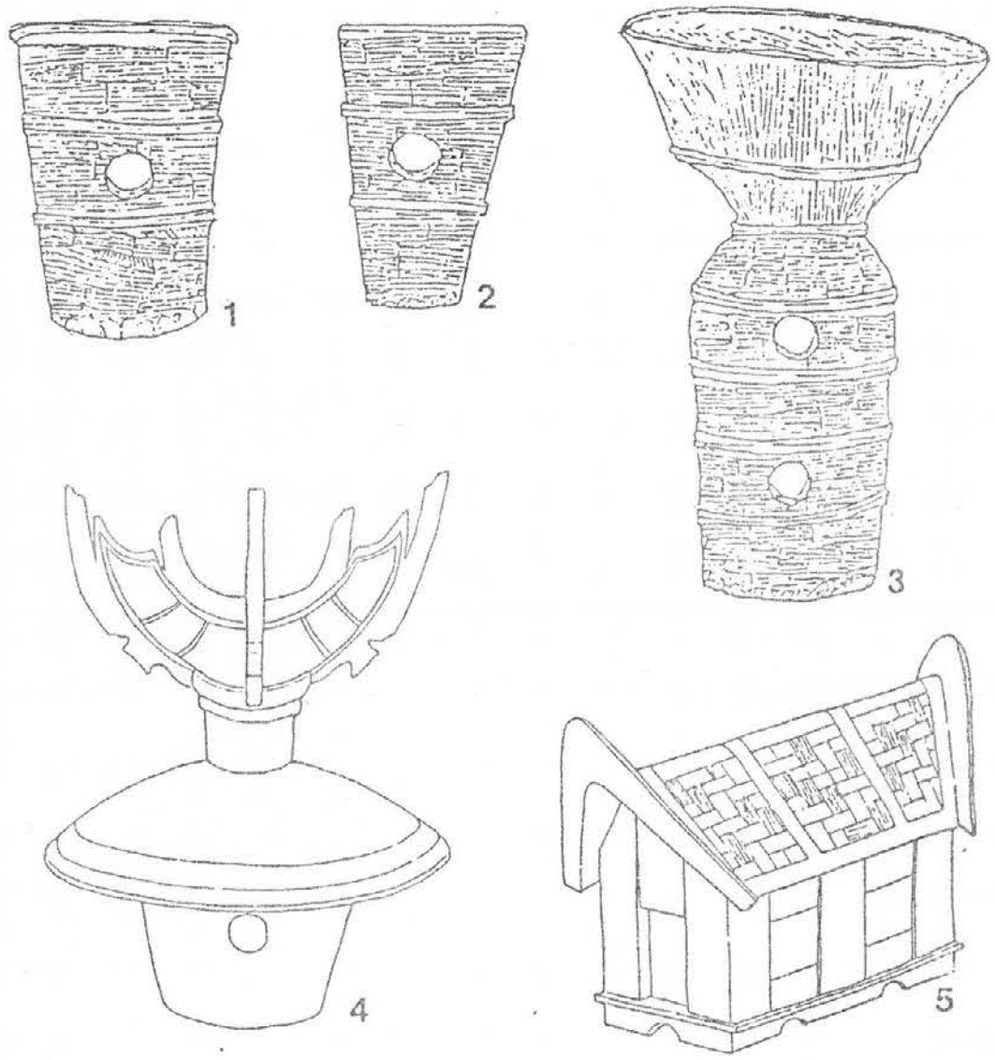


図５　埴輪（１・２　普通円筒埴輪、３　朝顔形円筒埴輪、４　衣蓋形埴輪　５　家形埴輪）

須恵器（すえき）　約50片の須恵器が発見されました。そのほとんどがくびれ部の墳丘裾やその外側の台状部で出ており、この場にお供えしたものです。その種類には器台（きだい）、聽（はそう）、壺（つぼ）杯（つき）、杯蓋（つきぶた）などがあります。時期は５世紀後半代で須恵器としては古い時期のものです。埴輪と一緒に当地で生産されたものと思いますが、現在のところこの時期に遡る窯跡は未発見です。

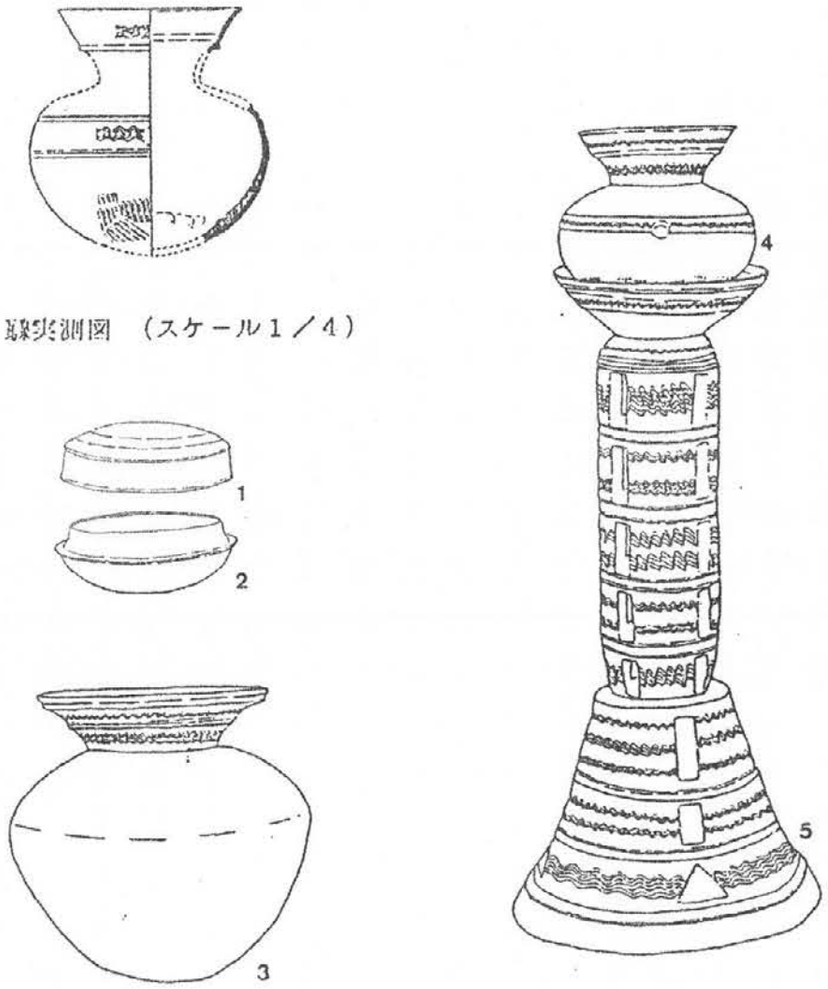


図６　須恵器（１　杯蓋、２　杯身、３　壺、４　聽、５　器台）

４．森ノ下遺跡

所　在　地　福井県遠敷郡上中町堤 森ノ下
調査原因　県営圃場整備事業及び杉山川改修工事に伴う緊急調査
調査主体　上中町教育委員会
調査担当　福井県立若狭歴史民俗資料館
調査期間　昭和62年12月19日～昭和63年 1月16日
調査面積　２８０㎡
時　　代　古墳時代
調査の概要

上中町の北部より流れ出る北川の支流、杉山川の改修工事及び流域の圃場整備事業が実施され、堤地区において耕作土を除去した際に土師器や須恵器の破片が発見されました。

堤地区(波古神社)に近い水田からは奈良時代のものと思われる須恵器片が発見されましたが、耕作土以下は黄褐色土の山土を含む礫層が堆積しており、遺物は含まれていませんでした。

一方、平地中央では杉山川によって運ばれたと思われる砂や礫の中にも遺物は含まれていましたが、特に河川のそばの湿地では建築部材などの木製品が出てきました。いっしょにでた土師器や須恵器の年代から５世紀後半から６世紀前半のものと思われます。

５．有田坂遺跡

所　在　地　福井県遠敷郡上中町杉山 有田坂
調査原因　県営圃場整備事業に伴う緊急調査
調査主体　上中町教育委員会
調査担当　福井県立若狭歴史民俗資料館
調査期間　昭和62年12月19日～昭和63年 1月16日
調査面積　９０㎡
時　　代　奈良時代

調査の概要

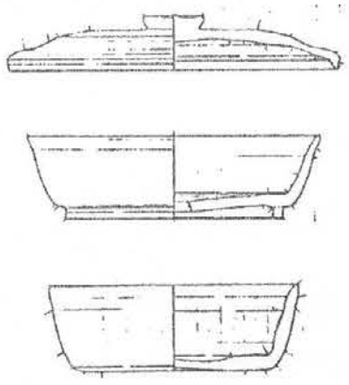
杉山川の東側には小さな谷がいくつも形成されており、谷のほとんどが水田化されています。今回、これらの谷のひとつ、有田坂において圃場整備事業が実施され、須恵器片が比較的多く発見されました。

有田坂においては、谷の北側斜面に山道がつけられた際に須恵器が発見され、南隣りの神子谷とともに奈良時代以降の須恵器生産地と考えられていました。

須恵器が発見された状況から灰原の一部であることも考えられ、調査を実施しました。調査の結果、水田部分には灰原は残っていませんでしたが、周辺部を調べたところ、北側の斜面に灰原の一部が残っているのを確認しました。

今回の調査で得られた須恵器は８世紀代のものと思われます。

第１図　遺跡位置図



第２図　有田坂遺跡出土須恵器

６．大島脇向・長浜・宮留遺跡

所　在　地　福井県大飯郡大飯町大島 脇向・長浜・宮留
調査原因　遺跡範囲確認調査
調査主体　大飯町教育委員会
調査担当　福井県立若狭歴史民俗資料館
調査期間　昭和62年10月11日～12月27日
調査面積　３３０㎡
時　　代　縄文時代中期　古墳時代後期　奈良～平安時代

調査の概要

大島地区は地下の埋蔵文化財博物館といわれ早くから研究対象とされてきました。例えば製塩の生産基盤が群集古墳（６Ｃ後半～７Ｃ初頭）を成立させたことを考古学的に証明できるなど興味のつきない所です。

大島半島は縄文時代早期から弥生前期・古墳・奈良・平安と各時代を通して人々の生活の場面を証明できる所です。

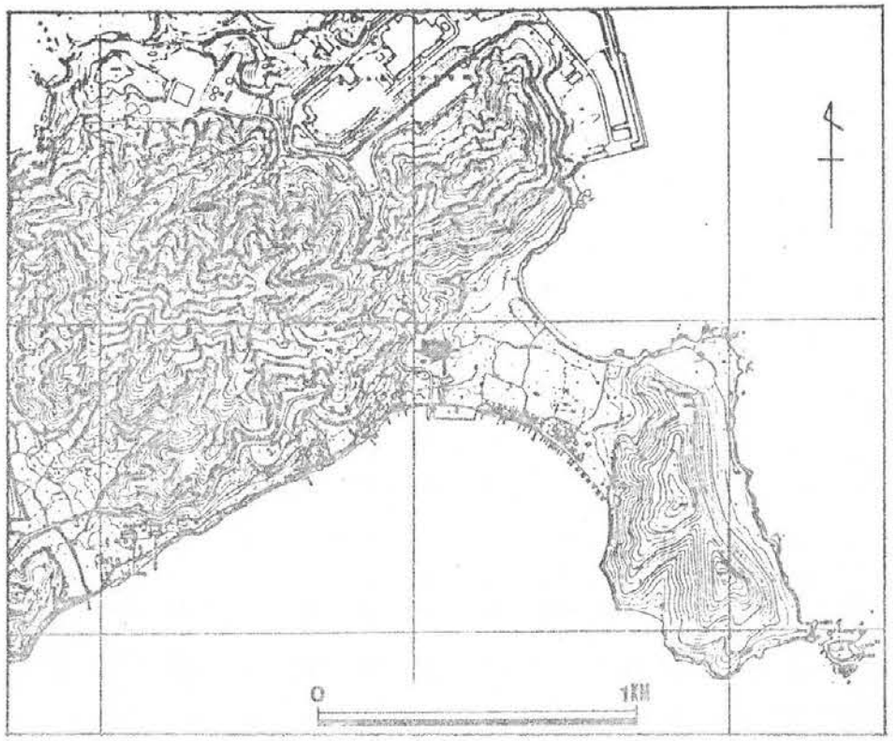
今回の遺跡範囲確認調査において、１区字長浜では製塩土器と共に１基の製塩炉（第４図・１号炉）と２群の廃炉を検出しました。１号炉は浜禰ⅡＢ古式（６Ｃ後半頃）と考えられます。

１区は全地域が製塩遺跡である事を確認し、将来土器製塩作業のしくみの全様（仕事場）を考察できる良好な遺跡と思われます。

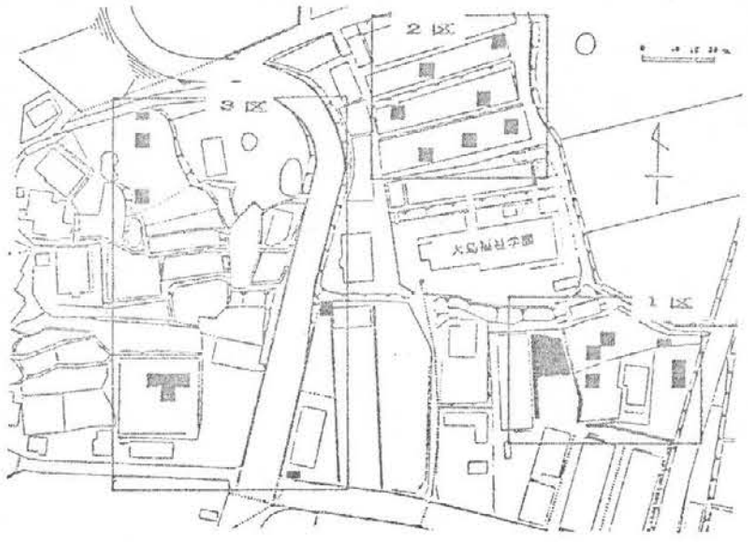
２区は大島福祉学園北側のなだらかな台地で縄文土器、石器が出土し、土壙（第３図）１基を検出しました。土壙はお墓または貯蔵穴と考えられます。土壙は住居の周辺に多数あるのが通例で、近くに住居跡があるものと考えられます。時期は縄文時代中期頃と思われます。

３区字脇向は１区と同様な土器製塩遺跡で水田となっていましたが、調査後すぐ埋め立てられ駐車場となりました。

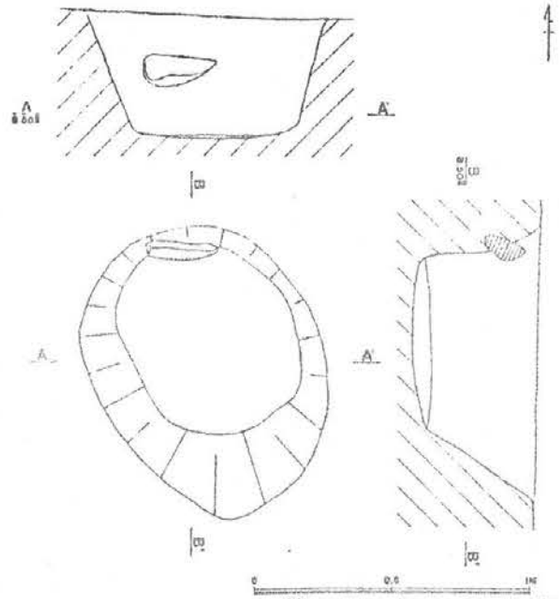
製塩土器は支脚を伴う時期のもので、１区より時代は新しくなり吉見浜式（９Ｃ）と塩浜式（10Ｃ）の製塩土器が使用される時期のものです。炉も良好な状態で保存されていることを確認しました。



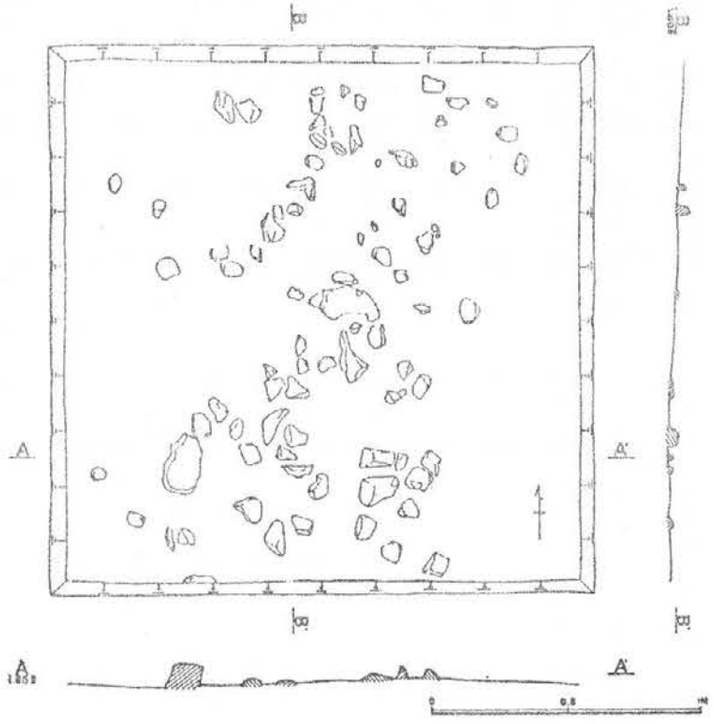
第１図　遺跡位置図



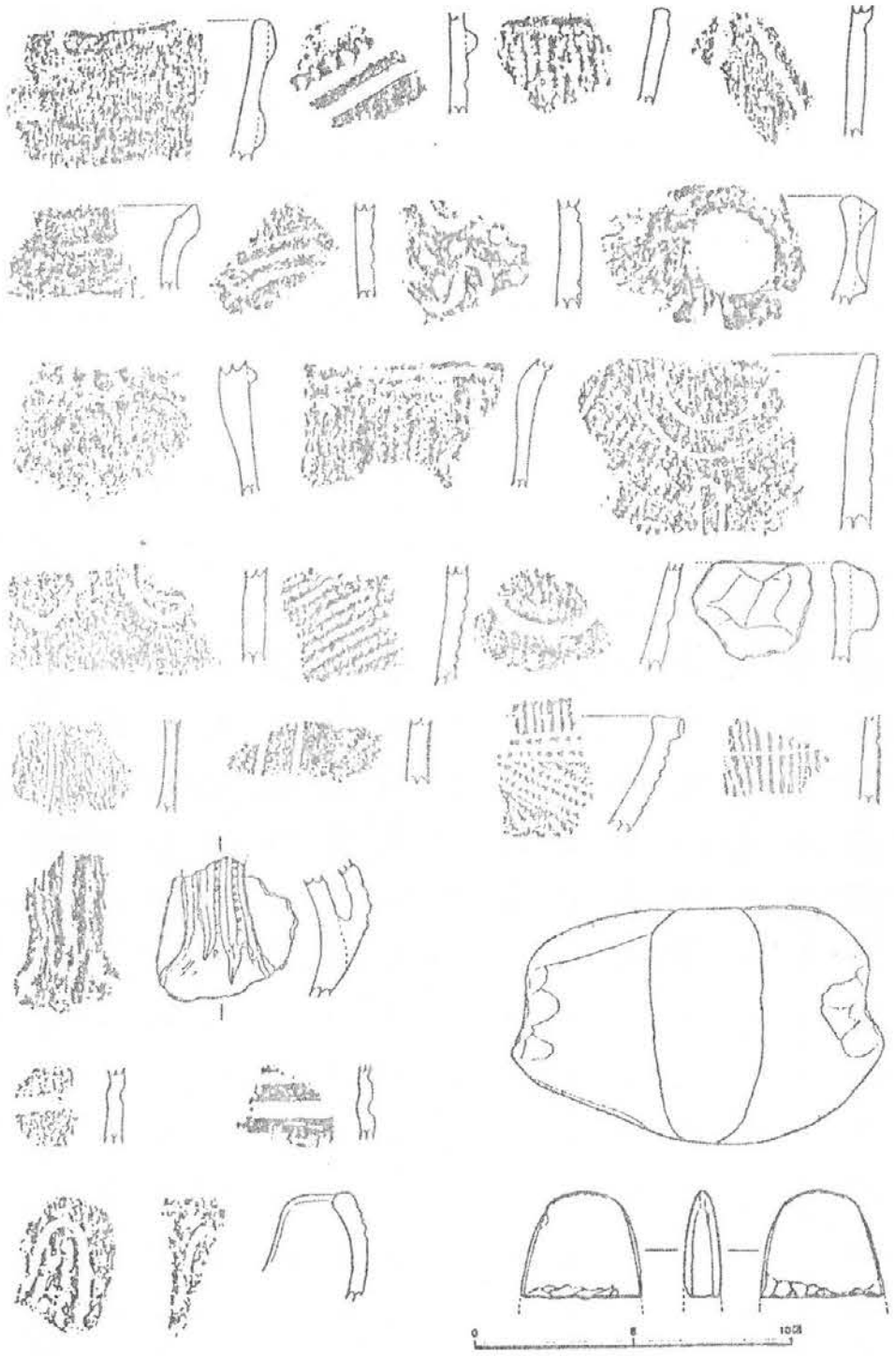
第２図　遺跡調査地区



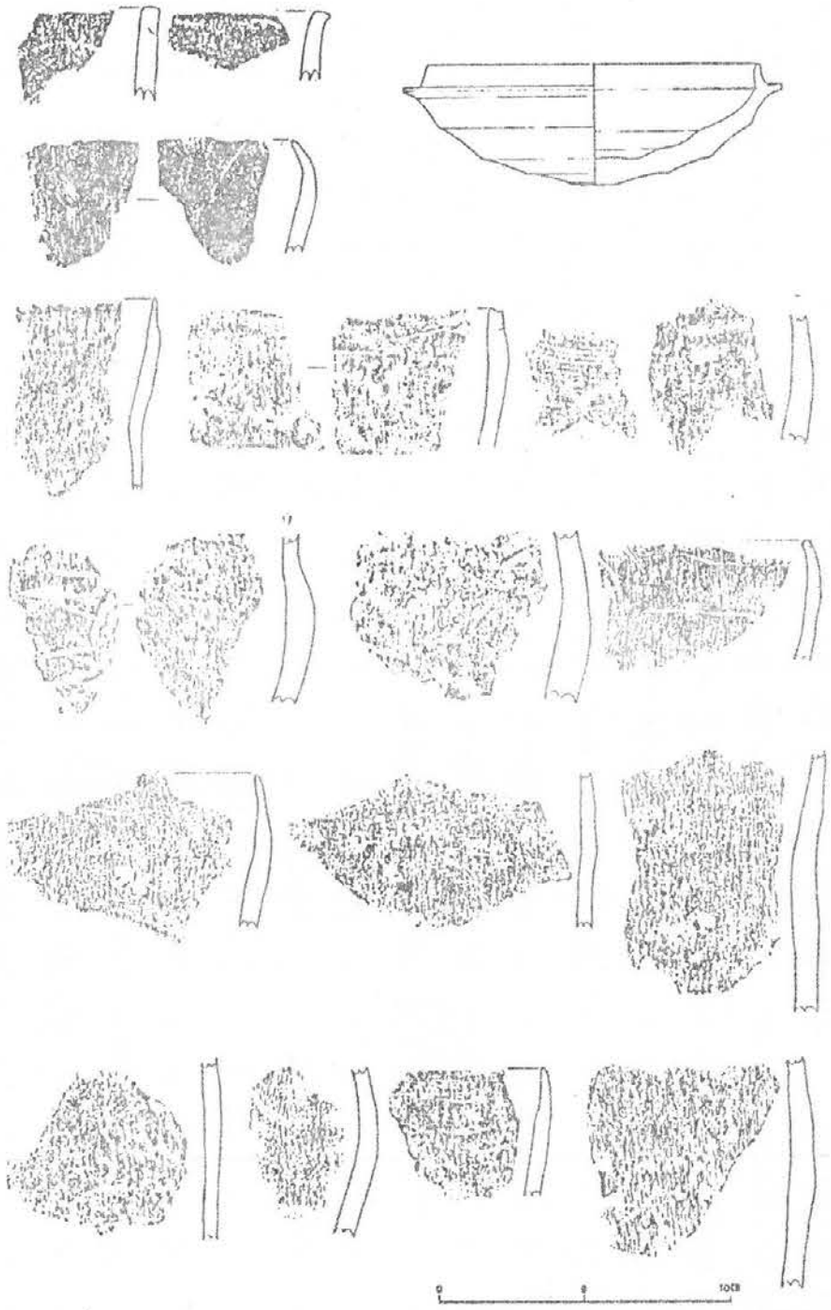
第３図　縄文時代中期の土壙



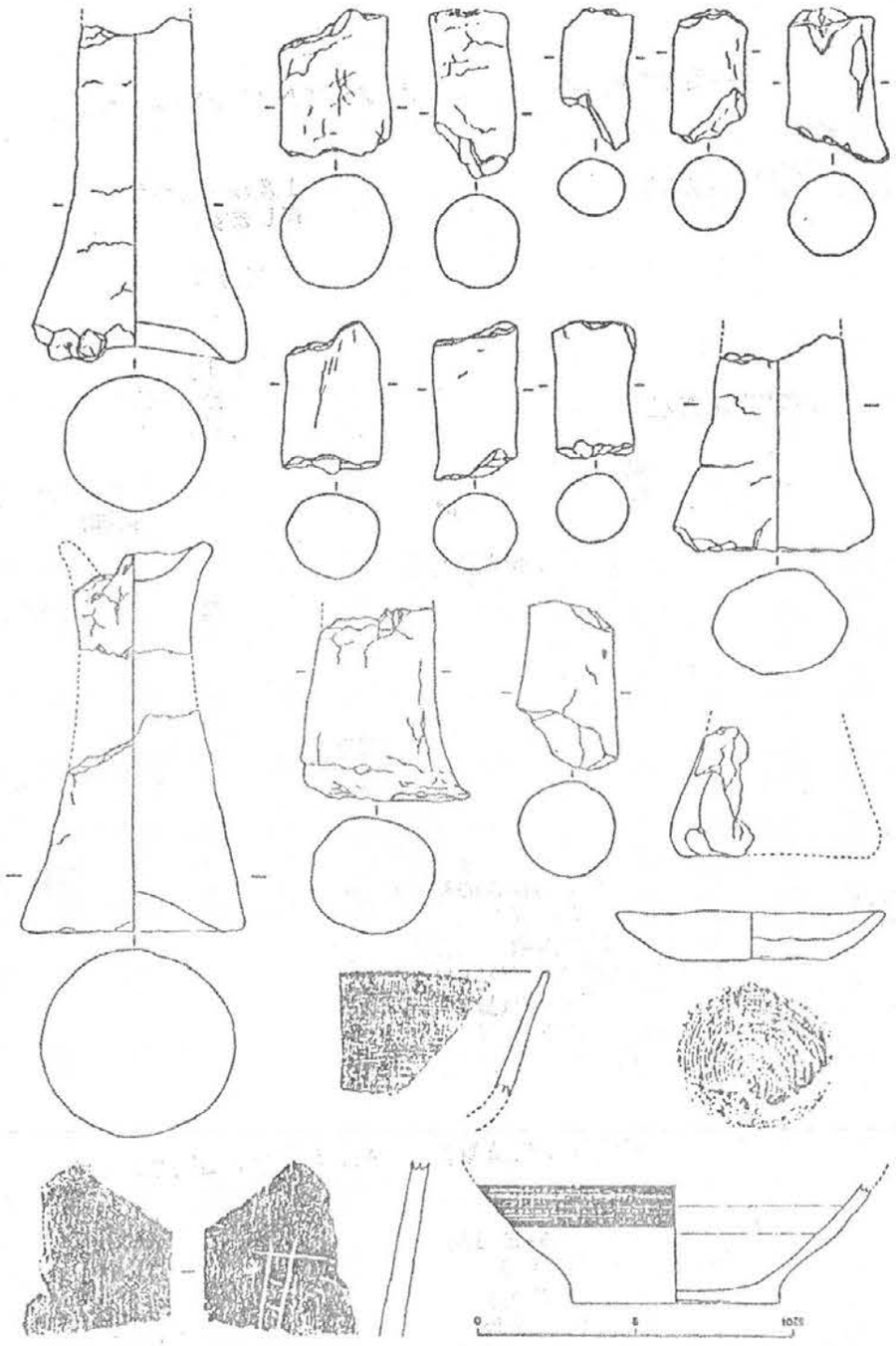
第４図　浜禰ⅡＢ古式製塩炉跡



第5図　縄文中期遺物



第6図　製塩土器・須恵器



第7図　製塩土器支脚・土師器・須恵器

7．朝比遺跡

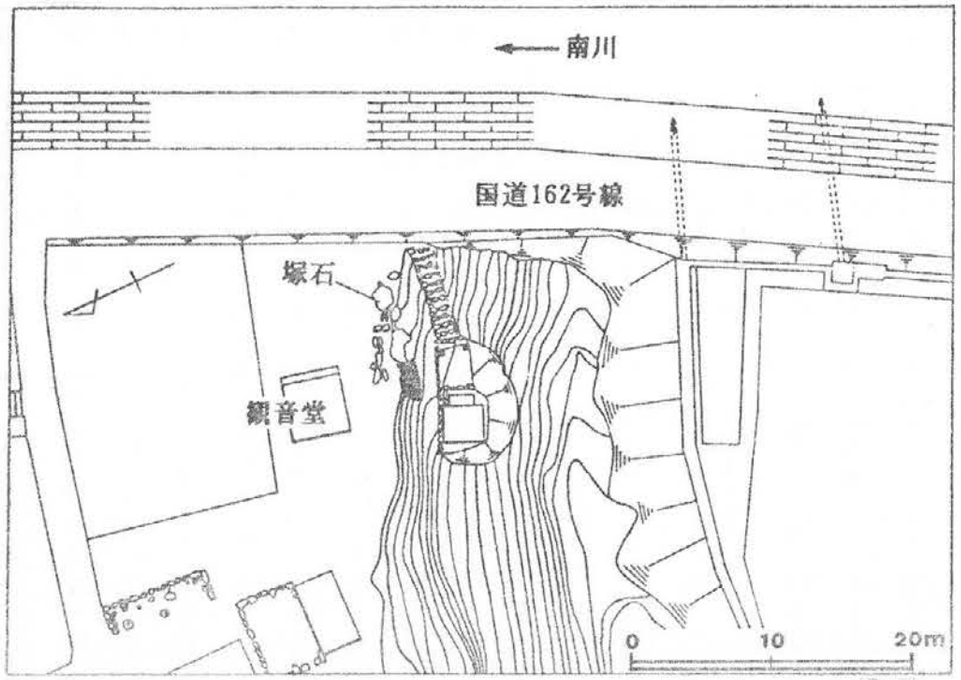
所　在　地　福井県遠敷郡名田庄村口坂本 朝比
調査原因　国道162号線道路特殊改良工事
調査主体　福井県教育委員会
調査担当　福井県立若狭歴史民俗資料館
調査期間　昭和62年 5月12日～ 6月12日
調査面積　３００㎡
時　　代　不明

調査の概要

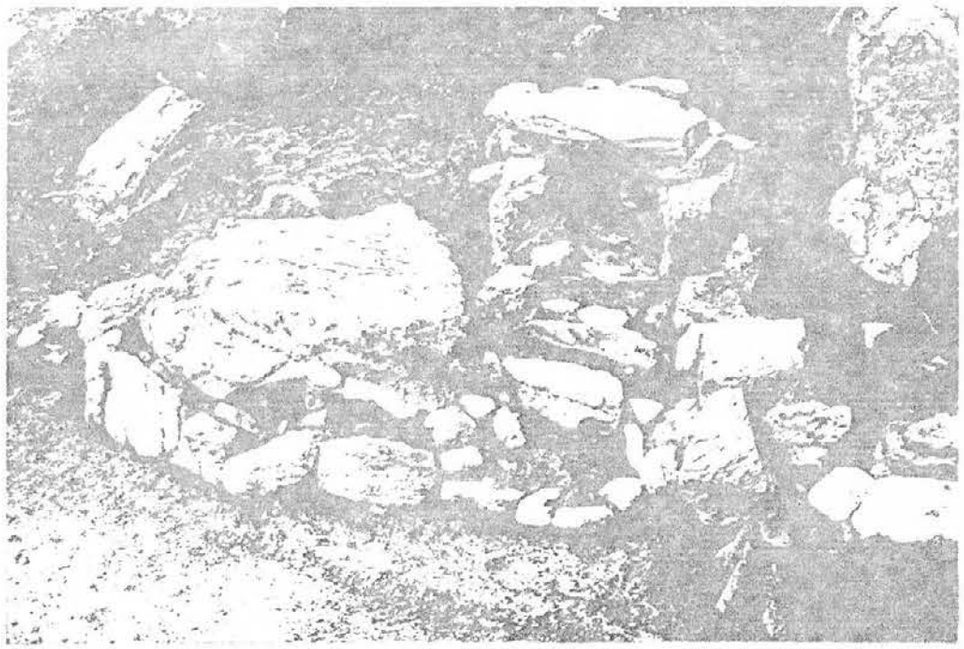
京都府との県境を源として小浜湾に注ぐ南川の上流に朝比集落があります。この集落の国道162号線沿いには馬頭観音を安置する観音堂があり、この観音堂の傍らには源平の大乱の際に京師より逃れて来て自害した朝比奈三郎義秀の所蔵品を納めたと伝えられる塚石があります。村では昔からこの石を動かすと祟があると恐れられ、今日まで保存されてきました。

今回、国道162号線の拡幅工事によってこの塚石が取り除かれることになり、調査を実施しました。また、大正12年頃に現在の国道162号線の拡幅が行なわれ、塚石の背後の尾根が削られた際に錆び朽ちた刀のようなものが出土したと伝えられており、拡幅工事計画内の尾根の部分についても調査を実施しました。

塚石周辺部の地形測量、実測図を作成した後、塚石を除去して調査を進めましたが、遺物の出土は全くみられず、所蔵品を埋納した形跡は認められませんでした。塚石は単に周囲をやや大きめに掘りくぼめて埋め込まれており、前面には一段ないし二段に石が積まれていました。従って塚石が埋められた時期、その性格については明確にすることができませんでした。また、背後の尾根の部分についても遺構、遺物の存在は認められませんでした。なお、塚石に隣接して石仏(地蔵尊)を安置する祠がつくられており、これについても調査を行ないました。この石組は塚石を埋めた後に構築されたものですが、塚石と同時期につくられたものであるかそれ以後につくられたものであるかは判断できませんでした。地蔵尊の光背には「世話人久兵衛」と刻まれていました。



第1図　遺跡付近地形図



第2図　遺構近景